

# シラーの“Die Bürgschaft Ballade”と 小栗孝則訳「人質 譚詩」

石橋 邦 俊

作品末尾に「(古傳説と、シルレルの詩から。)」<sup>1)</sup>と註記された太宰治の短編「走れメロス」は、角田旅人の指摘のように<sup>2)</sup>、小栗孝則訳『新編シラー詩抄』に収められた訳詩「人質 譚詩」<sup>3)</sup>に依拠した作品である。本論では、シラーの原詩 „Die Bürgschaft Ballade“ をもとに、小栗訳「人質 譚詩」を検討したい。

## 1. 小栗孝則訳『シラー詩集』と『新編シラー詩抄』

小栗訳『新編シラー詩抄』は、1937年、改造社より改造文庫の一冊（第二部第三〇〇篇）として出版された。しかし、1930年、同じく改造文庫の一冊として（第一部第一六〇篇）、同じ訳者による『シラー詩集』が刊行されていた。

小栗孝則訳『シラー詩集』（以下、『詩集』と略す）は、目次に続く訳詩51篇の後に「雑感詩 三十九篇」を配し、最後に「シラーに就て」と題された訳者の解説を置く、全359ページの訳詩集である。

訳詩51篇は、1780年の「ヘクトールの別離」から1805年の「友に」まで成立順に並べられ、必要に応じて、個々の訳詩の後に注釈が記されている<sup>4)</sup>。

「雑感詩 三十九篇」<sup>5)</sup>では、個別の詩のタイトルが記されていない。

12ページに亘る「シラーに就て」<sup>6)</sup>では、ゲーテとシラーをまず対置した後に、「そのシラーの存在してゐた十八世紀後半のドイツ文學界に流れていた」「シツルム ウント ドランク」の文学潮流を簡潔に描写し、その後、訳出され

た詩のタイトルを織り込みつつシラーの生涯を年譜の形で叙述し（約8ページ）、最後に「蛇足に近いが、シラーと時代を同じくし、或はシラーに影響を與へ、或はシラーの影響を受けた人々の」<sup>7)</sup>生没年と年表を掲げ（約2ページ）、閉じられている。

『新編シラー詩抄』（以下、『詩抄』と略す）は、巻頭に「譯者序」を置き、順次、目次、訳詩39篇、「雜感詩篇・四十三篇」、註解（「附シラー略年譜ギリシア神話概略」）と続く、全467ページの一冊である。

『詩集』の7年後に、小栗は自ら編んだシラーの訳詩集に、新たな標題を付して、新訳書を前訳書と同じ改造文庫に収めたことになる。その理由は、「譯者序」によれば、「字句の誤譯は（中略）敢て咎めだてしないにしても、全體に對する咀嚼は全く粗漏低劣で、従つて重大な誤解を犯し、一つの「シラー詩集」としての標準にさえも達していない」<sup>8)</sup>旧訳の改訳は「譯者としての責任だと」<sup>9)</sup>考えられたためである。この改訳（「文字通りの新譯・改編」<sup>10)</sup>）が、「現在の自分にとっての力一杯の仕事であることをもつて、一切の辯明と陳謝に代えたいと思ふ」<sup>11)</sup>と小栗は付言している。

「附録」と記された「雜感詩篇」を別にして、39篇の訳詩は、編年体ではなく、三部に分けられている。第一編「理想と人生」には、「瞑想的抒情詩」<sup>12)</sup>を中心とする15篇が、第二編「ポリクラテスの指輪」には「叙事的抒情詩」<sup>13)</sup>を中心とした12篇が配されている。

第三編「廣さと深さ」を成す12篇は、「譯者序」によれば、小栗ではなく、野上巖の訳である<sup>14)</sup>。

39篇中24篇（第三編中の3篇を含む）は、『詩集』にも採録されていた詩である<sup>15)</sup>。ただし、詩の訳文の見直しは当然として、一部の詩では標題すら変更されている。

「雜感詩篇・四十三篇」<sup>16)</sup>（「譯者序」並びに目次に小栗自ら「四十三篇」と明

記しているが、実際は41篇である）について小栗は「大體において舊譯書の改編」<sup>17)</sup>であると記している。『詩集』の39篇中、『詩抄』には36篇が再度、採録された（ただし、『詩集』では何故か2篇に分割されていた詩句を、『詩抄』ではシラーの原詩どおりの、本来の1篇に纏めているため、『詩集』からは37篇が採られたことになる<sup>18)</sup>）。しかし、この36篇の詩句のほとんどに、再録にあたって手が加えられている。

巻末の「註解」は「シラーの詩に就て」、「註解」、「シラー略年譜」、「ギリシア神話概略」の4部より成り、合わせて64ページである。

「シラーの詩に就て」は4ページの小論である。ゲーテとシラーを対置し、当時の文学潮流を概括した、『詩集』の「シラーに就て」に比して、小栗はシラーへの傾倒を強めているように思える<sup>19)</sup>。シラーの精神的姿勢から、その詩の特色と性格を導き出す叙述には、『詩集』刊行後の研究が凝縮されているのだろう。

21ページに亘る「註解」は、個々の訳詩についての注釈である。ただし、「雑感詩篇」については、訳者の立場を短く記すに止めている。

『詩集』では8ページだったシラー年譜は16ページに拡充されている。シラーの生涯をたどりながら、時々のヨーロッパの政治史的芸術的状況を随時、紹介しつつ、折りにふれ、同時代の中国や日本に言及している。

「ギリシア神話概略」には24ページが充てられた。訳詩の注解の補遺であり、小栗自身、「シラーの詩の理解を補ふため」<sup>20)</sup>と冒頭に添書するとともに末尾にも同一の趣旨を繰り返している。しかし著者のこの意図はともかく、ギリシア神話の神々の系譜や事績を概観し紹介した、優れた概略であると筆者には思える。

## 2. 小栗訳「人質 譚詩」とシラー“Die Bürgschaft Ballade”

太宰治が眼にした小栗訳「人質 譚詩」は、『詩抄』第二編「ポリクラテスの指輪」に収められている。

「叙事的抒情詩」を中心に編んだという第二編を構成する12篇は、「ヘクトールの告別」「アルプスの狩人」「カッサンドラ」「ヘロとレアンデル 譚詩」「タウヒェル（潜水者）」「ポリクラテスの指輪 譚詩」「人質 譚詩」「ハプスブルク伯爵」「騎士トッゲンブルク 譚詩」「イビクスの鶴 譚詩」「手袋 物語」「地球の分配」の順に配列されている。「タウヒェル（潜水者）」がジャンル規定（“Ballade”）を欠いているのは、小栗が訳出の底本とした「ベラーマン編纂の『シラー詩集』 Schillers Gedichte. Hersg. von L. Bellermann. Bibliographisches Institut. Leipzig u. Wien」<sup>21)</sup>に由来する。

シラーの“Die Bürgschaft Ballade”は1798年に書かれた。1連7行、全20連の中篇である。第二連を例に、詩形を確認してみたい。

„Ich bin“, spricht jener, „zu sterben bereit  
 Und bitte nicht um mein Leben;  
 Doch willst du Gnade mir geben,  
 Ich flehe dich um drei Tage Zeit,  
 Bis ich die Schwester dem Gatten gefreit;  
 Ich lasse den Freund dir als Bürgen,  
 Ihn magst du, entrinn' ich, erwürgen.“<sup>22)</sup>

××××××××××

××××××××

××××××××  
 ×××××××××  
 ××××××××××  
 ×××××××××  
 ×××××××××

(「×」は音節を、「´」は強拍を示す。)

第一、四、五行は4個の強拍を、第二、三、六、七行は3個の強拍を有し、強拍間は、1、もしくは2個の弱拍で埋められている。行末の押韻は、男性韻を大文字で、女性韻を小文字で表せば、AbbAAccとなる。4強拍の詩行には男性韻が、3強拍の詩行には女性韻が充てられていることがわかる。

この強拍と押韻の基本配置は全20連に、ほぼ一貫している<sup>23)</sup>。

ただし、第一連は例外である。

Zu Dionys, dem Tyrannen, schlich  
 Möros, den Dolch im Gewande;  
 Ihn schlugen die Häscher in Bande.  
 „Was wolltest du mit dem Dolche? sprich!“  
 Entgegnet ihm finster der Wüterich.  
 „Die Stadt vom Tyrannen befreien!“  
 „Das sollst du am Kreuze bereuen.“<sup>24)</sup>

第一行の強拍は3個である。更に第二行冒頭の“Möros”では、第一拍に強拍が配されている<sup>25)</sup>。強拍1個の削除と、行末からつぎの行頭に連続する2強拍

は、作品冒頭から、君主殺害未遂という事件に読者を巻き込む、シラーの優れた技巧だろう。更に、第二行冒頭の強拍では、この譚詩の主人公であり、1文の主語でもある“Möros”の名が明確に刻印される。

同時に、第一行末の“schlich”と呼応する第三行末には、暴君の言葉として命令形の“sprich!”を置き（短母音“i”をはさみこむ“schl-ch”“spr-ch”という強く鋭い子音も切迫した趣を作り出している）、続く第三行冒頭の“entgegnet”で、先行する“schlich”“schlugen”から鮮やかに「現在」へと時制を転換してみせる（以後、物語は現在形で進められる）。

君主殺害未遂とメロスの捕縛、王の尋問とメロスの返答、磔刑の言い渡しという急展開する事件の推移が、第一行の拍の変更と第二行へのアンジャンプマン<sup>26)</sup>の勢いを得て7行59音の中に描き出されているのである。王城からのメロスの出立と妹の婚礼、そして再びディオニユスのもとへ走り出すメロスを叙する第五連を除いて、第二連以降、詩中の出来事は複数の連にわたって叙述されている。

第一連を小栗は次のように訳している。

暴君ディオニスのところに

メロスは短剣をふところにして忍びよつた

警吏は彼を捕縛した

「この短剣でなにをするつもりか？ 言へ！」

険悪な顔をして暴君は問ひつめた

「町を暴君の手から救ふのだ！」

「磔になつてから後悔するな」 -<sup>27)</sup>

原詩で過去形から現在形に転換する“entgegnet”には「問いつめた」という過去

時制が充てられている。「人質 譚詩」は以後、専ら過去時制で進められて行く。

『詩抄』第二編「ポリクラテスの指輪」に採られた12篇のうち、ほとんどの詩篇において小栗は過去時制を基本としている。この過去時制に、時折り現在時制を交え、読者を人物の状況に立ち会わせる「歴史的現在」もしくは、一種「体験話法」的な効果を生み出している箇所は少なくない。「人質 譚詩」では、第十三連がその好例だろう。

ふと耳に、潺々と銀の音色のながれるのが聞こえた  
すぐ近くに、さらさらと水音がしてゐる  
じつと聲を呑んで、耳をすました  
近くの岩の裂目から滾々とささやくやうに  
冷々とした清水が湧きでてゐる  
飛びつくやうに彼は身をかがめた  
そして焼けつくからだに元氣をとりもどした<sup>28)</sup>

シラーの原文で、“horch!”、“sieh”という2個の命令形に加え、1個の場所の指示語“da”と、更に第四～五行のアンジャンプマン（4個のコンマによって、いわば「息を切りながら」第五行冒頭の動詞“springt”に崩れこみ、最後の強拍において主語“Quell”が明示される）によって、読者をメロスの聴覚、視覚、清水に潤される触覚へ同化させる効果を、原詩の簡潔さを保持したまま、小栗は動詞形の交替と「潺々と」「さらさらと」「滾々と」という擬態語で写し取ろうとしたのだろう（総じて、小栗の擬音語、擬態語の用法は巧みである）。

散文にせよ、詩の形態を取るにせよ、過去のある時点を舞台とする物語を日本語の現在時制で一貫させるのは難しいだろう。しかし、「ポリクラテスの指輪」中の多くの詩篇において、シラーの原詩では、登場人物の直接発言は別と

して、過去時制から現在時制への転換は、かなり早い時点で行われている。過去時制によって物語の場を一旦設定し終えれば、物語をシラーは「眼前の景」として読者に提示しようとしたと筆者には思える。

シラーの過去時制には読者にとっての「現在」のみか、物語の「現在」から見て、過ぎ去った時点を指示するというばかりではない用法があるようである。

大渦に盃を投げ入れる王の臣下への呼びかけから始まる“Der Taucher”<sup>29)</sup>の基本時制は「現在」である。全27連のこの“Ballade”<sup>30)</sup>の第五連と第十四連には、過去形の動詞が現れる。まず、第五連を見てみたい。

Und wie er tritt an des Felsen Hang  
 Und blickt in den Schlund hinab,  
 Die Wasser, die sie hinunterschlang,  
 Die Charybde jetzt brüllend wiedergab,  
 Und wie mit des fernen Donners Getöse  
 Entstürzen sie schäumend dem finstern Schoße.

第三行の“hinunterschlang”、第四行の“wiedergab”は、第五行冒頭に“Und”が置かれているとはいえ、第五、六行の「現在」から見た「過去」を指している。一旦は渦に呑まれた激浪が、また満ちた後に逆巻き、黒々とした巖にしぶきを上げるといふ大渦潮の事態の推移をなぞっているのである<sup>31)</sup>。

(続く第六連では、カリュプティスの潮の様を“waltet”“siedet”“braust”“zischt”“Gischt”と聴覚へ訴える言葉で描写する。第六、七行で“Und will sich nimmer erschöpfen und leeren, / Als wollte das Meer noch ein Meer gebären.”と締めくくられる海の有様は、「過去」から見た「現在」に、時間軸上に点描された第五連の、「物語」中の大渦を超えて、無時間の中に生起しているようにすら感じられる。

「物語」の「現在」は、“Doch endlich, da legt sich die wilde Gewalt,”と始まる第七連で再提示される。そして、大渦へ若者が飛び込む第八連と固唾を飲んで渦を見つめる人々の胸中が語られる第八～十一連第四行までを経た後に、“Und heller und heller, wie Sturmes Sausen, / Hört man’s näher und immer näher brausen.”と再び聴覚を指示する第五、六行を受け、第十二連第一～四行で第六連第一～四行が、ほぼそのまま再現される（前者の第四行“Flut”が後者では“Well”に変えられている）が、この第十二連を締めくくるのは、第五連そのままの第五行と、主語を第五連での“sie (=die Wasser)”から非人称の“es”に、副詞“schäumend”を“brüllend”に変えることで聴覚への傾斜を強めた第六行である。ほぼ同一の詩句による、この反復は、構造上の「枠」を形作ると同時に、聴覚的現象によって、あたかも永遠に続くかのように、否応なく内面に押しこめられていた人々の想いを、続く第十三連冒頭“Und sieh!”によって、一気に外界へ開放させ、鮮やかなコントラストを作り出すための不可欠の布石だろう。）

次に第十三～十五連を検討したい。

Und sieh! aus dem finster flutenden Schoß,  
 Da hebet sich’s schwannenweiß,  
 Und ein Arm und ein glänzender Nacken wird bloß,  
 Und es rudert mit Kraft und mit emsigem Fleiß,  
 Und er ist’s, und hoch in seiner Linken  
 Schwingt er den Becher mit freudigem Winken.

Und atmete lang und atmete tief  
 Und begrüßte das himmlische Licht.  
 Mit Frohlocken es einer dem andern rief.

„Er lebt! er ist da! es behielt ihn nicht!

Aus dem Grab, aus der strudelnden Wasserhöhle

Hat der Brave gerettet die lebende Seele.“

時制は、第十三連の「現在」から第十四連では（直接引用の人々の叫びを除いて）「過去」に変わり、第十五連第一～五行では「現在」へ戻され、最終行で再び「過去」が用いられている。この「現在」と「過去」の交替は、時間に沿った事態の推移を叙するものではあるまい。むしろ、叙述されていく事態が惹起する心理に関わっていると筆者は考える。

第五連と第十二連を「粹」として、第六～十一連では、大渦に飛び込む若者と、その行末を案ずる人々の不安と緊張が描かれる。潮のうねりとともに永遠に続くかと思われるこの緊張を破って、第十三連で若者が波間に姿を現す。人々が目撃するこの瞬間の「直接性」が現在時制で提示され、第十四連では、時間においても視覚においても一点に集中した刹那の後の解放に、過去時制が充てられるのである。シラーは、この第十四連第一行の2つの“atmete”と第二行“begrüßte”に主語を明示せず（無論、先行連の流れで見れば“er”、すなわち、若者だが）、かつ、第二行“rief”にも形式主語“es”を据え、動作の主体をあえてぼかして、第十四連の情景をあたかも遠景からとらえるように描こうとしたと筆者には思えるが、この点においても過去時制の「距離感」は不可欠だっただろう。

第十五連最終行の“wandte”は、続く第十六連から第二十二連まで、海中の様子を語る若者の言葉（第十七連以降、第二十二連第二行まで過去時制で語られ、第三～五行の危機と恐怖には現在時制が、第六行の脱出には再び過去時制が用いられている）への布石である。同時に、先行する五行で、若者が持ち帰った盃をワインで満たす、王の「愛らしい娘」（第四行）故に、第二十六連で、若

者が再び大渦へ身を投ずることを考え合わせれば、王へ向き直る第六行の過去時制には、1行遡って、王女へ寄せる若者の想いまでが読み取れると筆者は考える。現在時制の直接性と過去時制の距離感ゆえの効果だろう。

1連8行、全10連からなる“Ritter Toggenburg Ballade”<sup>32)</sup>では、第四連第一行の完了時制と、第五連の直接引用を除いて物語を叙述してきた現在時制が、第七連第四行以降、過去時制と交代する。

Und erbaut sich eine Hütte  
 Jener Gegend nah',  
 Wo das Kloster aus der Mitte  
 Düstrer Linden sah;  
 Harrend von des Morgens Lichte  
 Bis zu Abends Schein,  
 Stille Hoffnung im Gesichte,  
 Saß er da allein.

姉（もしくは妹）へ異性としての愛情を抱いてしまった「騎士」は、十字軍の一員として勲功を立てるものの、恋情に抗し得ず、故郷トッゲンブルクへ帰還する。しかし、姉は修道女となっていた。第七連以降、過去時制で描かれるのは、姉の暮らす修道院を望む菩提樹の林の小屋から修道院の窓を眺め続ける騎士の静かな日々である。現在時制で語られる激しい恋の想いに対し、過去時制は、諦念にも似た思慕の情と騎士のひそやかな死を読み手に伝えている。

“Der Taucher Ballade”と“Ritter Toggenburg Ballade”という、少なくともこの二篇にあって、現在時制を基本とした叙述中の過去時制に、シラーは、時間軸上の指示及び物語空間の設定とは別の意味を持たせていると考えてよいだ

ろう。小栗が『詩抄』の「ポリクラテスの指輪」に収めた「叙事的叙情詩」の基本時制を「人質 譚詩」を含め「過去」としたのは、それによって歴史的現在や「体験話法」的な現在形の効果を創りだす余地を担保できたにしても、原詩の意を十分に汲んだ選択とはいえないと筆者には思われる。

### 3. 「信實」という訳語

「信實とは決して空虚な妄想ではなかつた」、この1行を含む「人質 譚詩」最終連のディオニュスの言葉を、太宰治は、いくつかの句読点の付加以外、手を加えず、「走れメロス」末尾に採用した<sup>33)</sup>。

小栗訳「信實」は、シラーの原詩では“Treue”である。

“treu”及びその派生語は、“Die Bürgschaft Ballade”に三度、使用されている。第五連第一行、メロスの友人を指す“der treue Freund”<sup>34)</sup>、第十七連最終行“Liebe und Treue”<sup>35)</sup>、そして第二十連第四行“Und die Treue”<sup>36)</sup>である。

小栗はそれぞれに「親友は」、「愛と誠の力を」、「信實とは」という訳語を充てている。

『詩抄』に採られた詩に現れる“treu”及びその派生語と小栗の訳を並記してみよう。

“An die Freude”

・第十六連第三行“treu zu sein”<sup>37)</sup>: 小栗訳「忠實であること」<sup>38)</sup>

“Die Götter Griechenlands”

・第十連第三行“Treue Liebe fand den treuen Gatten”<sup>39)</sup>: 「まことの愛は誠實な配偶者を」<sup>40)</sup>

“Die Ideale”

・第一連第一行 “treulos”<sup>41)</sup>: 「不實にも」<sup>42)</sup>

・第八連第三行 “treulos”<sup>43)</sup>: 「不實にも」<sup>44)</sup>

“Die vier Weltalter”

・第十一連第六行 “Liebestreu”<sup>45)</sup>: 「愛の誠」<sup>46)</sup>

“Der Spaziergang”

・第一四九行 “Treue”<sup>47)</sup>: 「誠實」<sup>48)</sup>

“Das Lied von der Glocke”

・第十七連第二行 “der treue Mutter”<sup>49)</sup>: 「優しい母親」<sup>50)</sup>

・同第七行 “an den treuen Brust”<sup>51)</sup>: 「母親としてその胸に」<sup>52)</sup>

・同第十三行 “treues Walten”<sup>53)</sup>: 「忠實な世話働き」<sup>54)</sup>

“Hero und Leander”

・第十一連第六行 “falsch und treulos”<sup>55)</sup>: 「不實だ、誠がない」<sup>56)</sup>

“Der Ring des Polykrates”

・第四連第三行 “Dein treuer Feldherr”<sup>57)</sup>: 「將軍は」<sup>58)</sup>

“Ritter Toggenburg”

・第一連第一行 “treue Schwesterliebe”<sup>59)</sup>: 「常に變わらぬ姉妹の愛」<sup>60)</sup>

“Das Unwandelbare”

・第二行 “Sei getreu”<sup>61)</sup>: 「信實であれ」<sup>62)</sup>

“treuer” が訳出されなかったと思しい“Der Ring des Polykrates” 第四連第三行を含め、小栗の和訳が所謂「逐語訳」ではないことがわかる。「人質 譚詩」においても、“Freund” を修飾する “treue”、対句としての “Liebe und Treue”、そして独立した名詞である “die Treue” を文脈や語調を考慮しながら、訳し分けたのだろう。

太宰治の「走れメロス」では、妹の婚礼を終え、シラクスへ出発する場面で

「信實」という語が初めて使われる（「けふは是非とも、あの王に、人の信實の存するところを見せてやろう」<sup>63)</sup>。しかし、「信實」のこの配置は、それ以前の、「人を、信ずる事が出来ぬ」<sup>64)</sup>とデイオニスの心を代弁したシラクスの老人の言葉と、その後のメロスと王の対論での「人の心を疑ふのは、最も恥ずべき悪徳だ」<sup>65)</sup>（メロス）、「疑ふのが、正當の心構へなのだ」<sup>66)</sup>、「信じては、ならぬ」<sup>66)</sup>（王）、「そんなに私を信じられないならば、」（メロス）、「人は、これだから信じられぬと、」<sup>67)</sup>（王）と繰り返される「信實」の否定形と、更に祝宴の席の妹へのメロスの言葉（「おまへの兄の、一ばんきらひなものは、人を疑ふ事と、それから、嘘をつく事だ」<sup>68)</sup>）に表れる、「信實」の否定の更なる否定によって十分に準備された結果である。「信じぬ」「疑う」という否定的な心的姿勢の反復による抑圧は、メロスのシラクスへの再出発、即ち本来の目的への出発とともに「信實」という語に一気に転換され、解放されるのである。

この後に、「岩清水の場」を前に、白昼の暑熱に疲弊しきったメロスの脳裏に、「信實」は「信じる」の派生形や「正義」、「愛」と組み合わせられ、同時にその否定としての「不信」、「裏切り」がちりばめられた文脈において、集中的に反復される<sup>69)</sup>。

デイオニスの改心の言は、「走れメロス」にあって、周到に用意された後の一言である。

シラーの原詩に、“Treue”をめぐるメロスと王の対論はない。第三連第一～二行“Da lächelt der König mit arger List / Und spricht nach kurzem Bedenken:”<sup>70)</sup>の王の心中は、最終連から遡って推察されるかもしれないが、読者の推測が友人同士の“Treue”に一義的に到達するわけではあるまい。シラーが、おそらくは意図して残した、この大きな「余白」を利用して、太宰は小栗詔の二行「それを聞きながら王は残虐な氣持で北叟笑んだ／そして少しのあひだ考へてから言つた」<sup>71)</sup>から、デイオニスの性格規定と「走れメロス」全篇の起動力を汲み上

げたのだろう。

先行する伏線の欠如にもかかわらず、シラーの原詩のディオニユスの“Treue”に読者が唐突の感を覚えないのは、この言葉に先行する第十七連最終行“Und glaube an Liebe und Treue!”との呼応ゆえだろう。第十八連のメロスの言葉とは違ったかたちで（生きている二人を前に）、王は“Treue”のあり様を悟るのである。

原詩のこの対応は、2つの“Treue”に別の訳語を充てた小栗訳の場合、読者には不明なままである。対句に組み込まれた1文字の「誠」は、2文字から成り、独立している「信實」に比して、意味においても視覚聴覚的にも軽い。「親友は」ではなおさらである。

シラーは、“treu”をまず、叙事の文中の名詞“Freund”を修飾する形容詞として登場させ、次にメロスが口にする対句を構成する名詞のひとつとし、最後に独立した名詞として王の口の上らせている。詩の流れに沿った、この言葉の意味の漸増が意図されていたと思われるが、それでも、既述のように、最終連の“Treue”には、第十七連の同じ名詞が前提とされていたと考えてよいだろう。

第五連で“der treue Freund”と抱き合った後に王のもとを出発したメロスは、フィロストラトスへの返答に続く第十八連で（おそらくは）王の居城にしつらえられた友の刑場へたどり着く。第五連第一行の“treue”と第十七連最終行の（最終強拍を持つ）“Treue”には、構造上の位置づけを想定してよいだろう。詩の両端に置かれた王城の場と中間部を区切っているのである。更に、全20連の中で、ともに叙事の文を含まず、全行が登場人物の発言に充てられた、連続する2連（第十六、十七連）の末尾への“Treue”の配置からは、最終連の暴君の改心ではなく、第十七連最終行“Und glaube an Liebe und Treue!”が詩全体の中核として浮かび上がってくる。

小栗訳「信實とは決して空虚な妄想ではなかつた」の一行をシラーは“Und

die Treue, sie ist doch kein leerer Wahn,”と記している。この第二十連第四行を除く139行中に、連続する3個の弱拍は現れていないので、男性韻で終わるこの行の強拍は「××××××××××××」の配置となろう。先行する弱拍の後の、第一強拍を含む“Treue”の後に「,」によって休止を指定し、弱拍の代名詞“sie”を主語としてあらためて文を続ける書き方は、行頭第一弱拍“Und”とも相まって、決然とした宣言というより、ある種の「ためらい」を表していると筆者には思える<sup>72)</sup>。小栗が「まぢまぢと」と訳出した第一行の第三強拍を含む“verwundert”は、第十九連第六行の“ein menschliches Rühren”（小栗訳「人間らしい感動」）を自ら扱いかねている暴君の心中を示唆していよう<sup>73)</sup>。“treu”、“Treue”という語が原詩で与えられている構造上の意味と最終連第四行の語り口を考え合わせると、詩を締めくくる王の言葉に“Die Bürgschaft Ballade”の最大の重みが置かれたとは、筆者は考えない。

シラーの原詩とは異なり、刑場で、メロスの帰着のみか、友情故の殴り合いの一部始終を目にする、太宰のデイオニスにとって、改心はいわば必定である。物語を振り返る読者にとって、「走れメロス」のクライマックスは、おそらく、ここにある<sup>74)</sup>。「人質 譚詩」全連を通じて、最終連に到って初めて小栗が採用した「信實」という訳語が、太宰の巧妙なストーリー展開と場面設定を呼び起こしたとも言えるだろう。

#### \* 使用テキストならびに主要参考文献

- ・シラー：小栗孝則訳『シラー詩集』1930年 改造社（以下、『詩集』と略す）
- ・シラー：小栗孝則訳『新編シラー詩抄』1937年 改造社（以下、『詩抄』と略す）
- ・Schiller：Bellermann, L. (hrsg.): “Schillers Gedichte”, um1915, Bibliographisches Institut. Leipzig und Wien（以下、Bellermannと略す）
- ・Schiller：Golz, J. (hrsg.): “Sämtliche Gedichte in einem Band”, 1991, Frankfurt am Main und Leipzig

- ・ 太宰治：『太宰治全集4』 1998年 筑摩書房（以下、『全集』と略す）
- ・ 杉田英明：『葡萄樹の見える回廊』 2002年 岩波書店

### \*注

- 1) 『全集』、303ページ。
- 2) 角田旅人：「『走れメロス』材源考」（1975年）。筆者が眼にしたのは、香川大学学術情報リポジトリでの公開版である。<http://shark.lib.kagawa-u.ac.jp/kuir/metadata/3469>を参照願いたい。
- 3) 『詩抄』、263～273ページ。
- 4) 『詩抄』（「譯者序」）5～6ページには次のように記されている。「註解は一舊譯書では詩一篇毎に付記してをいたが、見た目にうるさい感じがするので、今度は一つに纏めてみた。新譯着手の当初は出来るだけ刻銘に註解を附けるつもりで用意もしたが、結局詩は詩で語らしめなければならないもの、詩は其自身が一切の説明であることを思ひ、また刻銘な註解は詩の中とか美しさとか良さをもむしろ極限し、反つて冒瀆する恐れが多分にあることを感じて、止むない註解以外のものは成可く除去する方法をとつた。」
- 5) 『詩集』、321～344ページ。
- 6) 同上、347～358ページ。
- 7) 同上、356ページ。
- 8) 『詩抄』、3ページ。
- 9) 同上。
- 10) 同上、4ページ。
- 11) 同上。
- 12) 同上。
- 13) 同上。
- 14) 同上、5ページ。
- 15) 同上、4～5ページ。
- 16) 『詩抄』5ページ（「譯者序」）に小栗は、「これはシラーの一つの馨咳を傳へたい気持ちから、甚だ未完全なものだが、附録として編入してをいた。」と記している。また、「註解」の426～427ページには、「すべて表題を持つた短詩」と断つた上で、「表題は一切記載していないが、これは譯者の一存で、無題の方が反つて味が深く、内容に對し悪い制限をみなくてよいと思つたからだ。」とも弁明している。この姿勢は、『詩集』の「雜感詩」でも同様であつただろう。翻訳をする側の裁量ともいえようが、タイトルの除去だけでなく、詩の外形の変更もかなり加えられているため、小栗の訳から原詩へ辿り着くのは、時に容易ではない。更に、誤訳と思しい箇所も少なくない。「逐語訳」のみを尊いとは考えない筆者にとつても、翻訳者の姿勢として問題であると思われる。

- 17) 『詩抄』、5 ページ。
- 18) 該当するのは『詩集』332～333ページ、「其處に何にが在つたか、自然が何にを作つたか」と同333～334ページ、「創造する心」である。両者の間に別の詩一篇が置かれている。『詩抄』では381ページに一篇にまとめられて（「そこに何にがあつたかを」）、再録されている。原詩は、“Genius” (Bellermann, S.356) と題された一篇である。同様の「分割訳」は、『詩抄』には見られないが、部分訳は数篇、確認できる。
- 19) 「シラーの詩に就て」冒頭 (403ページ) で、ドイツの「南方」であるゲーテに「北方」であるシラーを (同等に) 対置させながら、両者の制作態度を綴る、その後の記述を見れば、小栗はシラーに優位を与えているように思われる。「ゲーテは自分を取り巻いている環境に對しては、一切をただ嫌惡の念と嘲笑 (反逆的) のうちに葬り去り、なにか超然と靜觀的な立場にたつて、「觀照」と「認識」との世界の中で懺悔と告白を書き綴つてゐたが—シラーはそれとは反對に、環境の壓迫と慘めな衝突をしなければならなかつた理想主義のために、その衝突を解消せしむるために、自分の身を犠牲にして一つの精神文化 (一政治的自由に進む道程の條件として一) を高揚した詩人であつた。」
- 20) 『詩抄』、443ページ。
- 21) 同上、6 ページ。小栗が「ギリシアの神々」の翻譯に際し、第二稿を採用しているのも、Bellermann に第二稿のみが収録されているためである。
- 22) Bellermann, S.231. Bellermann の“Schillers Gedichte”は、所謂ドイツ文字で印刷されている。本論文では、現在通用のラテン文字に置き換えて引用する。
- 23) 第三連第三行“Drei Tage will ich dir schenken.”は「××××××××××」と、同第五行“Eh’ du zurück mir gegeben bist,”は「××××××××××」と読むことが可能かもしれないが、前者については、先行する第二連第四行“*Ich flehe dich um drei Tage Zeit,*”との関連において「3日」という日限がこの詩の中で持つ重要性を、後者では、ほぼ同様の文脈から、“eh”の意味を考慮し、行頭第一拍に強拍を置きたいと思う。また、第二十連第四行“*Und die Treue, sie ist doch kein leerer Wahn,*”は、「××××××××××」とも読めるかも知れないが、本論後述のように、3連統の弱拍は疑問とせざるを得ないと思う。
- 24) Bellermann, S.231.
- 25) 行頭第一拍に強拍を配したと思ひのは、既述のように (注23)、他に第三連第三行と同第五行である。
- 26) この箇所他にアンジャンプマンの好例と思われるのは、第八連第四～五行“*Es eilen die Stunden, im Mittag steht / Die Sonne, und wenn sie niedergeht*”、第九連第六～七行“*Und teilt mit gewaltigen Armen / Den Strom, und ein Gott hat Erbarmen.*”、第十連第三～四行“*Da stürzt die raubende Rotte / Hervor aus des Waldes nächtlichem Ort,*”、第十一連第六～七行“*Und drei, mit gewaltigen Streichen, / Erlegt er, die andern entweichen.*”、第十三連第四～五行“*Und sieh, aus dem Felsen, geschwäzigt, schnell, / Springt murmelnnd hervor ein lebendiger Quell,*”、第十七連第一～二行“*Und ist es zu spät, und kann ich ihm nicht, / Ein Retter,*

willkommen erscheinen.”である。なかでも、第八連第五～六行ではメロスの切迫した心情の表出として、第九連第六～七行と第十一連第六～七行では、それぞれ「濁流の場」と「山賊の場」の締めくくりとして、アンジャンプマンによるリズムの変化が効果を上げている。

27) 『詩抄』、263ページ。

28) 同上、269ページ。

29) Bellermann, S.191ff.

30) 「詩のテキストの選択については、個々の詩の初公刊時の初出稿を基本とし、後に大きく変更が加えられた場合、これを独立した稿として扱う方針を取った」旨、記載されている(S.563)、Golz編纂の“Sämtliche Gedichte in einem Band”では、タイトルに“DER TAUCHER / Ballade”というジャンル規定が記されている(S.421)。

31) 小栗の訳はこうである。「彼は断崖の端にすすみ出て / しづかに深淵の中をのぞきこんだ / 水は岩ごと捲き込むやうに引くと見るまに / カリュプゼスの渦はまた唸りをあげて盛りかえし / 號々とあたりにとどろく響きをあげて / 岸壁に襲ひかかり、飛沫をあげてみる」(『詩抄』、244ページ)。第三行の代名詞“sie”は Charybde であろう。「渦巻く水が岩を巻き込むように引く」のではなく、「深々と呑み込んでいた水を、カリュプゼスが唸りをあげて吐き出す」のほうが原詩に近いのではないか。

32) Bellermann, S.203ff.

33) 小栗訳では、「おまへの望みは叶つたぞ / おまへらはわしの心に勝つたのだ / 信實とは決して空虚な妄想ではなかつた / どうかわしをも仲間に入れてくれまいか / どうかわしの願ひを聞き入れて / おまへの仲間の一人にしてほしい」である(『詩抄』、273ページ)。太宰は、「おまへの望みは叶つたぞ。おまへらは、わしの心に勝つたのだ。信實とは、決して空虚な妄想ではなかつた。どうか、わしをも仲間に入れてくれまいか。どうか、わしの願ひを聞き入れて、おまへの仲間の一人にしてほしい。」と句読点を加えている(『全集』、303ページ)。

34) Bellermann, S.231.

35) Ebd., S.234.

36) Ebd.

37) Ebd., S.64.

38) 『詩抄』、46ページ。

39) Bellermann, S.70.

40) 『詩抄』、53ページ。

41) Bellermann, S.105.

42) 『詩抄』、101ページ。

43) Bellermann, S.107.

44) 『詩抄』、105ページ。

45) Bellermann, S.288.

- 46) 『詩抄』、113ページ。
- 47) Bellermann, S.131.
- 48) 『詩抄』、152ページ。
- 49) Bellermann, S.252.
- 50) 『詩抄』、177ページ。小栗は先行する第十七連第一行“Ach! die Gattin ist's, die teure” (Bellermann, S.252)を「嗚呼！あの忠實な主婦であつた」(『詩抄』、177ページ)と訳している。“teure”を“treue”と誤読したとも考えられる。
- 51) Bellermann, S.252.
- 52) 『詩抄』、178ページ。
- 53) Bellermann, S.252.
- 54) 『詩抄』、178ページ。
- 55) Bellermann, S.270.
- 56) 『詩抄』、229ページ。
- 57) Bellermann, S.199.
- 58) 『詩抄』、256ページ。
- 59) Bellermann, S.203.
- 60) 『詩抄』、283ページ。
- 61) Bellermann, S.98.
- 62) 『詩抄』、397ページ。
- 63) 『全集』、295ページ。
- 64) 同上、290ページ。
- 65) 同上、291ページ。
- 66) 同上。
- 67) 同上、292ページ。
- 68) 同上、294ページ。
- 69) 同上、297～299ページ。
- 70) Bellermann, S.321.
- 71) 『詩抄』、264ページ。
- 72) 杉田英明は、その優れた著作『葡萄樹の見える回廊』365ページ以降で、ディオニユスの改心の言を考察している。その際、シューベルト作曲の“Die Bürgschaft” D.246について、「この作品に曲を付けたシューベルトも、この科白を荘重だが甘美で美しい旋律に乗せ、それまでの厳しい緊張を孕んだ部分との鮮やかな対照を形造っている。」と評している(同書、365～366ページ)。シューベルトの作品では、このくだりは“und die Treue ist doch kein leerer Wahn,”と短縮されている。シラーの原詩とは、異なるリズムである。
- 73) 小栗の「まぢまぢと」を、太宰は「まじまじと」(『全集』、302ページ)と、表記を変えて採用した。小栗訳「人間らしい感動」は、太宰の「顔をあからめて」(同上)に対応する

だろう。「走れメロス」結尾の「勇者は、ひどく赤面した。」(同上、303ページ)と考えあわせれば、「はじらい」に関する太宰の心中を想像できる。「邪智暴虐の王」(同上、289ページ)も「勇者」メロスも、「赤面」を通して人間に戻るのである。

- 74) 「走れメロス」中に小栗訳「人質 譚詩」から引用・転用された語句は多数、確認できる。しかし、このデイオニスの言葉のように、まとまった、小栗訳そのままの引用は他にない。太宰に、引用の自覚があったか否かは不明である。しかし仮に、今で言う「コピー&ペースト」の感覚をここに読みこめば、「走れメロス」のクライマックスであるはずの王の改心と、その直後の民衆の歓呼(「『萬歳、王様萬歳。』」、『全集』、303ページ)の意味合いに微妙な変化が生じる可能性もあるだろう。

\* 参考のため、シラーの“Die Bürgschaft Ballade”(Bellermann, S.231ff.)と小栗孝則訳「人質 譚詩」(『詩抄』、263～273ページ)を以下に掲げる。

## Die Bürgschaft

Ballade

1798

Zu Dionys, dem Tyrannen, schlich  
Möros, den Dolch im Gewande;  
Ihn schlugen die Häscher in Bande.  
„Was wolltest du mit dem Dolche? sprich!“  
Entgegnet ihm finster der Wüterich.  
„Die Stadt vom Tyrannen befreien!“  
„Das sollst du am Kreuze bereuen.“

„Ich bin“, spricht jener, „zu sterben bereit  
Und bitte nicht um mein Leben;  
Doch willst du Gnade mir geben,  
Ich flehe dich um drei Tage Zeit,  
Bis ich die Schwester dem Gatten gefreit;  
Ich lasse den Freund dir als Bürgen,  
Ihn magst du, entrinn' ich, erwürgen.“

Da lächelt der König mit arger List  
Und spricht nach kurzem Bedenken:  
„Drei Tage will ich dir schenken;

Doch wisse, wenn sie verstrichen, die Frist,  
 Eh' du zurück mir gegeben bist,  
 So muß er statt deiner erlassen,  
 Doch dir ist die Strafe erlassen.“

Und er kommt zum Freunde: „Der König gebeut,  
 Daß ich am Kreuz mit dem Leben  
 Bezahle das frevelnde Streben.  
 Doch will er mir gönnen drei Tage Zeit,  
 Bis ich die Schwester dem Gatten gefreit;  
 So bleib' du dem König zum Pfande,  
 Bis ich komme, zu lösen die Bande.“

Und schweigend umarmt ihn der treue Freund  
 Und liefert sich aus dem Tyrannen;  
 Der andere ziehet von dannen.  
 Und ehe das dritte Morgenrot scheint,  
 Hat er schnell mit dem Gatten die Schwester vereint,  
 Eilt heim mit sorgender Seele,  
 Damit er die Frist nicht verfehle.

Da gießt unendlicher Regen herab,  
 Von den Bergen stürzen die Quellen,  
 Und die Bäche, die Ströme schwellen.  
 Und er kommt ans Ufer mit wanderndem Stab,  
 Da reißet die Brücke der Strudel hinab,  
 Und donnernd sprengen die Wogen  
 Des Gewölbes krachenden Bogen.

Und trostlos irrt er an Ufers Rand;  
 Wie weit er auch spähet und blicket  
 Und die Stimme, die rufende, schicket,  
 Da stößet kein Nachen vom sichern Strand,  
 Der ihn setze an das gewünschte Land,  
 Kein Fischer lenket die Fähre,  
 Und der wilde Strom wird zum Meere.

Da sinkt er ans Ufer und weint und fleht,  
Die Hände zum Zeus erhoben:  
„O hemme des Stromes Toben!  
Es eilen die Stunden, im Mittag steht  
Die Sonne, und wenn sie niedergeht  
Und ich kann die Stadt nicht erreichen,  
So muß der Freund mir erleichen.“

Doch wachsend erneut sich des Stromes Wut,  
Und Welle auf Welle zerrinnet,  
Und Stunde an Stunde entrinnet.  
Da treibt ihn die Angst, da faßt er sich Mut  
Und wirft sich hinein in die brausende Flut  
Und teilt mit gewaltigen Armen  
Den Strom, und ein Gott hat Erbarmen.

Und gewinnt das Ufer und eilet fort  
Und danket dem rettenden Gotte.  
Da stürzt die raubende Rotte  
Hervor aus des Waldes nächtlichem Ort,  
Den Pfad ihm sperrend, und schnaubet Mord  
Und hemmet Wanderers Eile  
Mit drohend geschwungener Keule.

„Was wollt ihr?“ ruft er, für Schrecken bleich,  
„Ich habe nichts als mein Leben,  
Das muß ich dem Könige geben!“  
Und entreißt die Keule dem Nächsten gleich;  
„Um des Freundes willen erbarmet euch!“  
Und drei mit gewaltigen Streichen  
Erlegt er, die andern entweichen.

Und die Sonne versendet glühenden Brand,  
Und, von der unendlichen Mühe  
Ermattet, sinken die Kniee.  
„O hast du mich gnädig aus Räubershand,

Aus dem Strom mich gerettet ans heilige Land,  
 Und soll hier verschmachtet verderben,  
 Und der Freund mir, der liebende, sterben?“

Und horch! da sprudelt es silberhell,  
 Ganz nahe wie rieselndes Rauschen,  
 Und stille hält er, zu lauschen;  
 Und sieh, aus dem Felsen, geschwätzig, schnell,  
 Springt murrend hervor ein lebendiger Quell,  
 Und freudig bückt er sich nieder  
 Und erfrischt die brennenden Glieder.

Und die Sonne blickt durch der Zweige Grün  
 Und malt auf den glänzenden Matten  
 Der Bäume gigantische Schatten;  
 Und zwei Wanderer sieht er die Straße ziehn,  
 Will eilenden Laufes vorüberfliehn,  
 Da hört er die Worte sie sagen:  
 „Jetzt wird er ans Kreuz geschlagen.“

Und die Angst beflügelt den eilenden Fuß,  
 Ihn jagen der Sorge Qualen;  
 Da schimmern in Abendrots Strahlen  
 Von ferne die Zinnen von Syrakus,  
 Und entgegen kommt ihm Philostratus,  
 Des Hauses redlicher Hüter,  
 Der erkennt entsetzt den Gebieter:

„Zurück! du rettetest den Freund nicht mehr,  
 So rette das eigene Leben!  
 Den Tod erleidet er eben.  
 Von Stunde zu Stunde gewartet' er  
 Mit hoffender Seele der Wiederkehr,  
 Ihm konnte den mutigen Glauben  
 Der Hohn des Tyrannen nicht rauben.“—

„Und ist es zu spät, und kann ich ihm nicht,  
 Ein Retter, willkommen erscheinen,  
 So soll mich der Tod ihm vereinen.  
 Des rühme der blut'ge Tyrann sich nicht,  
 Daß der Freund dem Freunde gebrochen die Pflicht;  
 Er schlachte der Opfer zweie  
 Und glaube an Liebe und Treue!“

Und die Sonne geht unter, da steht er am Tor  
 Und sieht das Kreuz schon erhöht,  
 Das die Menge gaffend umstehet;  
 An dem Seile schon zieht man den Freund empor,  
 Da zertrennt er gewaltig den dichten Chor:  
 „Mich, Henker!“ ruft er, „erwürgt!  
 Da bin ich, für den er gebürget!“

Und Erstaunen ergreift das Volk umher,  
 In den Armen liegen sich beide  
 Und weinen für Schmerzen und Freude.  
 Da sieht man kein Auge tränenleer,  
 Und zum Könige bringt man die Wundermär:  
 Der fühlt ein menschliches Rühren,  
 Läßt schnell vor den Thron sie führen.

Und blicket sie lange verwundert an.  
 Drauf spricht er: „Es ist euch gelungen,  
 Ihr habt das Herz mir bezwungen;  
 Und die Treue, sie ist doch kein leerer Wahn,  
 So nehmet auch mich zum Genossen an:  
 Ich sei, gewährt mir die Bitte,  
 In eurem Bunde der dritte.“

人質 譚詩

暴君ディオニスのところに

メロスは短剣をふところにして忍びよつた  
警吏は彼を捕縛した  
「この短剣でなにをするつもりか？ 言へ！」  
険悪な顔をして暴君は問ひつめた  
「町を暴君の手から救ふのだ！」  
「磔になつてから後悔するな」-

「私は」と彼は言つた「死ぬ覚悟である  
命乞ひなぞは決してしない  
ただ情けをかけたいつもりなら  
三日間の日限をあたへてほしい  
妹に夫をもたせてやるそのあひだだけ  
その代り友達を人質として置いてをこう  
私が逃げたら、彼を絞め殺してくれ」

それを聞きながら王は殘虐な氣持で北叟笑んだ  
そして少しのあひだ考へてから言つた  
「よし、三日間の日限をおまへにやらう  
しかし猶豫はきつちりそれ限りだぞ  
おまへがわしのところに取り戻しに來ても  
彼は身代りとなつて死なねばならぬ  
その代り、おまへの罰はゆるしてやらう」

さつそくに彼は友達を訪ねた。「じつは王が  
私の所業を憎んで  
磔の刑に處すといふのだ  
しかし私に三日間の日限をくれた  
妹に夫をもたせてやるそのあひだだけ  
君は王のところに人質となつてゐてくれ  
私が繩をほどきに歸つてくるまで」

無言のままで友を親友は抱きしめた  
そして暴君の手から引き取つた  
その場から彼はすぐに出發した  
そして三日目の朝、夜もまだ明けきらぬうちに  
急いで妹を夫といつしよにした彼は

氣もそぞろに歸路をいそいだ  
日限のきれるのを怖れて

途中で雨になつた、いつやむともない豪雨に  
山の水源地は氾濫し  
小川も河も水かさを増し  
やうやく河岸にたどりついたときは  
急流に橋は浚はれ  
轟々とひびきをあげる激浪が  
メリメリと橋桁を跳ねとばしてゐた

彼は茫然と、立ちすくんだ  
あちこちと眺めまはし  
また聲をかざりに呼びたててみたが  
繫舟は残らず凌はれて影なく  
目ざす對岸に運んでくれる  
渡守りの姿もどこにもない  
流れは荒々しく海のやうになつた

彼は河岸にうづくまり、泣きながら  
ゼウスに手をあげて哀願した  
「ああ、鎮めたまへ、荒れくるふ流れを！  
時は刻々に過ぎてゆきます、太陽もすでに  
眞晝時です、あれが沈んでしまつたら  
町に歸ることが出来なかつたら  
友達は私のために死ぬのです」

急流はますます激しさを増すばかり  
波は波を捲き、煽りたて  
時は刻一刻と消えていつた  
彼は焦燥にかられた、つひに憤然と勇氣をふるひ  
咆え狂ふ波間に身を躍らせ  
満身の力を腕にかけて流れを掻きわけた  
神もつひに憐愍を垂れた

やがて岸に這ひあがるや、すぐにまた先きを急いだ

助けをかけた神に感謝しながら—  
しばらく行くと突然、森の暗がりから  
一隊の強盗が躍り出た  
行手に立ちふさがり、一撃のもとに打ち殺そうといどみかかつた  
飛鳥のやうに彼は飛びのき  
打ちかかる弓なりの棍棒を避けた

「何をするのだ？」驚いた彼は蒼くなつて叫んだ  
「私は命の外にはなにも無い  
それも王にくれてやるものだ！」  
いきなり彼は近くの人間から棍棒を奪ひ  
「不憫だが、友達のためだ！」  
と猛然一撃のうちに三人の者を  
彼は仆した、後の者は逃げ去つた

やがて太陽が灼熱の光りを投げかけた  
つひに激しい疲労から  
彼はぐつたりと膝を折つた  
「おお、慈悲深く私を強盗の手から  
さきには急流から神聖な地上に救はれたものよ  
今、ここまできて、疲れきつて動けなくなるとは  
愛する友は私のために死なねばならぬのか？」

ふと耳に、潺々と銀の音色のながれるのが聞こえた  
すぐ近くに、さらさらと水音がしてゐる  
じつと聲を呑んで、耳をすました  
近くの岩の裂目から滾々とささやくやうに  
冷々とした清水が湧きでてゐる  
飛びつくやうに彼は身をかがめた  
そして焼けつくからだに元氣をとりもどした

太陽は緑の枝をすかして  
かがやき映える草原の上に  
巨人のやうな木影をゑがいてゐる  
二人の人が道をゆくのを彼は見た  
急ぎ足に追ひぬこうとしたとき

二人の會話が耳にはいつた  
「いまごろは彼が磔にかかつてゐるよ」

胸締めつけられる想ひに、宙を飛んで彼は急いだ  
彼を息苦しい焦燥がせきたてた  
すでに夕映の光りは  
遠いシラクスの塔樓のあたりをつつんでゐる  
すると向ふからフィロストラトスがやつてきた  
家の留守をしてゐた忠僕は  
主人をみとめて愕然とした

「お戻りください！ もうお友達をお助けになることは出来ません  
いまご自分のお命が大切です！  
ちようど今、あの方が死刑になるところです  
時間いつばいまでお歸りになるのを  
今か今かとお待ちになつてゐました  
暴君の嘲笑も  
あの方の強い信念を變へることは出来ませんでした」-

「どうしても間に合はず、彼のために  
救ひ手となることが出来なかつたら  
私も彼と一緒に死のう  
いくら粗暴なタイラントでも  
友が友に對する義務を破つたことを、まさか褒めまい  
彼は犠牲者を二つ、屠ればよいのだ  
愛と誠の力を知るがよいのだ！」

まさに太陽が沈もうとしたとき、彼は門にたどり着いた  
すでに磔の柱が高々と立つのを彼は見た  
周圍に群衆が撫然として立つてゐた  
繩にかけられて友達は釣りあげられてゆく  
猛然と、彼は密集する人ごみを掻きわけた  
「私だ、刑吏！」と彼は叫んだ「殺されるのは！  
彼を人質とした私はここだ！」

がやがやと群衆は動搖した

二人の者はかたく抱き合つて  
悲喜こもごもの氣持で泣いた  
それを見て、ともに泣かぬ人はなかつた  
すぐに王の耳にこの美談は傳へられた  
王は人間らしい感動を覺えて  
早速に二人を玉座の前に呼びよせた

しばらくはまぢまぢと二人の者を見つめてゐたが  
やがて王は口を開いた。「おまへの望みは叶つたぞ  
おまへはわしの心に勝つたのだ  
信實とは決して空虚な妄想ではなかつた  
どうかわしをも仲間に入れてくれまいか  
どうかわしの願ひを聞き入れて  
おまへの仲間の一人にしてほしい」